ポケットモンスター レグルス

Ferix

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　レグルス

【Ｎコード】
Ｎ３４６０Ｚ

【作者名】
Ｆｅｒｉｘ

【あらすじ】
Ｄ・Ｈ団リーダーであるターナーの世界征服に立ち向かう、主人公のカズキとそのポケモンたちとの話である
少し執筆者の妄想も入ってます。

ｅｐｉｓｏｄｅ１　旅の予兆（前書き）

Ｆｅｒｉｘです！

基本はゲームをプレイしてるのを基準にしてます

初投稿なので下手ですがよろしくお願いします

episode1　旅の予兆

ここはポケモンと人間が共存する世界
ポケモンと人が協力し合い生きている
ポケモンを使い［悪］をはたらく人間もいる
いままでにもたくさんそんなことあった
俺も2回そんなことがあった
一つはホウエンで、もう一つはトーホクで
チャンピオンにもなったが、そんな器じゃないし、いろんな地方にも行きたい

「次はどこいくかな」
「どこに行くの？」
その声が聞こえて目の前が何かで覆われる
「ミドリか？」
「当ったり～」
こいつはホウエンで住んでた家のお隣さんだ
同い年でちょっとうるさい奴だ
「久しぶりだな、いつ以来？」
「うーんと、こおりの島だよね最後」
「そうだったっけ？」
「うん、そんなことよりどこに行くの？」
「他の地方だよ」

「他の地方でもチャンピオン狙うの？」
「まだちゃんと決めてないけど、まぁ最終的にはそうなるんじゃねーかな」
「どこの地方にするの？」
「ジョウトにでも久しぶりに帰るかな」
「えっ、カズキ君ってジョウト出身なの！？」
「ああ、言ってなかったっけ。父さんはもともとウツギ博士の助手をしてたんだ。それでその後母さんと俺のふたりでミシロに引っ越したんだ。そしたら父さんはトーホクの研究所を任されてまた引っ越したんだ」
「そうだったんだね」
「ああ、まあそれ以外にもジョウトに行きたい理由はあるんだけどな」
「なになに？」
「まえにギンノさんがジョウトのシロガネ山に強いトレーナーがいるっていってたからさ」
ギンノさんはトーホクのチャンピオンであり、水の都アルトマーレジムのジムリーダーだ。昔、銀色の魔女と言われてたらしい。
「さすがチャンピオンだね、強いトレーナーがいるとすぐに食いつくねぇ」
「別にいいだろ」
「悪いなんかいってないよ、それより私も連れてってよ」
「え、なんで？」
「別にいいでしょ」
「まぁ、別にいいけど…」
「ありがとう！じゃあ荷物取りにいかないとね」
「そうだ、トーホクに家あんの？」
「借りれる場所ないからカズキくんのお母さんに頼んで荷物置かしてもらってるんだ」
「今初めてしったよ…」

「とりあえず荷物取りにいかないとね」
「ああ、そうだな」

～ハクジタウン～

「ただいま、母さん」
「お帰りなさい、カズキ」
「おじゃましまーす」
「あら、いらっしゃいミドリちゃん。カズキが女の子連れてくるなんて」
「荷物取りにきただけだよ、母さん」
「あら、またどっかにいくの」
「うん、ジョウトにいこうと思ってるんだ」
「懐かしいわね、ジョウト。母さんも行こうかしら？」
「くるの！？」
「冗談よ、母さんは家守らないといけないしね」
「そっか、じゃあちょっと荷物つめてくるよ」
階段を登る二人

このときまだ誰もなにが起こるかは知る由も無かった

ｅｐｉｓｏｄｅ１　旅の予兆（後書き）

３日に一度かけるようにいたしますのでお願いします

ｅｐｉｓｏｄｅ２　船内での出会い（前書き）

なんか…ビミョーです…

ｅｐｉｓｏｄｅ２　船内での出会い

「準備できたか？」
「できたよ」
「よし、じゃあ行くか」
階段を降り、母に挨拶をつげると二人は外にでた
「カズキ君、どうやって行くつもり？」
「アーシア島からジョウトのタンバに向かって船がでてるはずだからそれに乗って行くよ」
「じゃあアーシア島に行こう！」
ポケットからボールを取り出し空に向かって投げると、なかからトロピウスとドラドーンがでてくる
「トロピウス！【そらをとぶ】だ！」
「ドラドーンも【そらをとぶ】よ！」
二人は空に上がった
ちなみにふたりの手持ちは

カズキ

トロピウス
ファマイン
フローリア
バフォット
リーフィス
ガブリアス

ミドリ

ドラドーン
エレキブル
ユニサス
タテボーシ
ブーバーン
プラネム

「このままアーシア島までいくぞ」

同時刻　レンジャーベース

「テテレテッテレー、モスギスさん登場！」
「やぁモスギスどうしたんだい？」
「ジャッキーに報告があるのです、ななな、なんと！ターナーが動きだしました！」
「それは本当かモスギス！？」
「はぁい、これはポウがつかんだ情報なのでしんじるべきでふ！」
「狙いはどこかわかるか？」
「あはい、ターナーはジョウトを狙ってるようです」
「わかった、モスギスは先にジョウトにいっていてくれ、俺はナツユキと後から行く」
「了解！」
（戦いがまた始まるのか…）

2日前　ポケモン城

「もう一度このポケモンを使うとはな、いつかの復讐を、恐怖を見せてやる。お前の大切なものがなくなるのはお前のせいだと感じるがいい、ククク…」
冷たいその笑い声は静かに闇に消えていった

現在　アーシア島

「ちょっとチケット買ってくるから待っといてくれ」
「私もついていこうか？」
「別にいいよ、お前の分も買ってくるから」
「そう？ありがとう」
そういうとカズキはチケット売り場に向かって歩きだした
（暇だなー、カズキ君ってポケモンのことばっかりだなー、ちょっとは見てくれてもいいのに）
チケット売り場から戻ってくるカズキ
「ほら、これ船のチケット」
「ありがとう、いくらだった？」
「あー、別にいらねーよ」
「えっ、いいの？」
「別にいいよ、ほら早く行くぞ」
「う、うん。ありがとう」
船に向かって歩き出すふたり
船に乗り込み部屋を、探す
「にしてもでかい船だね」
「まぁ豪華客船だしな」
「そんなお金どこにあったの…？」
「なんか、トレーナーがたくさん勝負しかけてくるからいつの間にかな」
「へー、そうなんだ」

そして自分の部屋番号をみつけるミドリ
「あっ、私ここだ」
「俺は隣だ」
「偶然だね！」
「そうだな、とりあえず荷物置いてくるからまた後でな」
「うん！」
部屋に入るふたり
「へー、結構大っきいなここの部屋」
ここの部屋は1人部屋にしてはおおきい
「でてこい、みんな」
ギャーオ
「疲れをとっといてくれよ」
そういうとカズキは部屋をでて隣の部屋をノックする
「おーい、まだか？」
「いま行くー」
そういうと部屋からでてくるミドリ
ミドリは後ろで髪をくくっていて可愛らしい、一般にオシャレな服をきていた
（うっ、か、可愛い）
「？、どうしたの？」
首をかしげるミドリ
「な、なんでもねーよ／／／／　　そ、それより早くいこーぜ、お腹すいてしょーがねーよ」
「そうだね」
そうして船内を歩くふたり
（な、なんか緊張してるし！頑張れ俺！）
「いつみても広いなー」
「そ、そうだな」
「どうしたの？」
「な、なんでもない」

「ふうん」
いろいろ見て回っているとうしろから声が聞こえてくる
「あれ？カズキ？」
ふりかえると見たことがある人がいた
「あなたは、ユウキさん！」

episode2　船内での出会い（後書き）

コメント待ってまーす

ｅｐｉｓｏｄｅ３　バトル大会（前書き）

やっぱビミョーです…

とりあえず三話目どうぞ！

episode3　バトル大会

「あなたは、ユウキさん！」
「やっぱりカズキか！えっと…こちらの女の子は？」
「あっ、はじめまして、ミドリです」
（かっこいい人だなぁ）
「よろしく、俺はユウキ！　　んん？ミドリって確かハルカのいとこにもいたような…」
「そうなんですよ、ハルカお姉ちゃんといとこです。ユウキさんの話はよくハルカお姉ちゃんからきいてます。ホウエンのチャンピオンになったってききました」
「あの時はおれもポケモン図鑑を集めてたしさ。それよりふたりもジョウトに何しにいくんだ？」
「俺の故郷なんでね」
「へぇそうだったんだな」
カズキはユウキになぜホウエン、トーホクに来たのかをはなす
「そうだったんだな、やっぱりジョウトでもチャンピオン狙うのか？」
「もちろんですよ！それよりユウキさんはジョウトに何しにいくんですか？」
「まぁ、ちょっとな…」
首をかしげるカズキ
「そうだ！いまからご飯食べるんですけど、ユウキさんもどうですか？」
「俺はさっき食べたからいいよ、それより8時からポケモンバトルの大会があるんだけどでないか？」

「でますでます！」
「私はやめときます、自信ないんで、」
「ならカズキ今からエントリーしに行くつもりだからお前の名前もかいておくよ」
「お願いします」
ユウキは去っていく
「ねぇ、カズキくんとユウキさんはどっちがつよいの？」
「一勝一敗だよ」
「互角なんだ～、私なんか一回もカズキくんに買ったことないのに、ユウキさんはすごいなー。出なくて正解だったね！」
「まぁ、だてに伝説の名をしょってないよな」
「伝説の名？」
「えーと、一年前にホウエンで異常気象あっただろ？」
「カズキくんが解決したやつでしょ？」
「そうだ、それと同じような事件がその時から3年前、つまり今から4年前にもあったんだ。それを解決したのがユウキさんだったんだ」
「だから伝説なんだね」
「そーゆーことだ」
「今回のバトルでどっちが伝説の名にふさわしいか決まるかもね！」
「かもな」
食事を済ませたふたりは一旦部屋に戻りポケモンを連れてきた
そして、ミドリは観客席にカズキは大会出場者の控え室にむかった
そこにはトーナメント表があった
そこには32人の名前が書かれている
「俺たちは決勝で戦うみたいだな」
うしろからユウキが話しかけられる
「そうみたいですね、ユウキさん。負ける気はないですから」
「それはこっちもだよ、カズキ。全力を出し切ろう」
従業員出口からスタッフが出てくる

「それでは今から大会のルール説明をいたします。バトル形式はシングルバトル。ポケモンは3匹です。それではいまからポケモンのエントリーをいたしますので呼ばれましたらこちらまでお願いいたします」
（3対3か…どのポケモンでいくかな）
「ヒイラギ　カズキさん、こちらまでどうぞ」
（あいつらにしよう）
エントリーパネルに打ち込む
「それでは、いまから一回戦をはじめます！ユウキさん、こがねさんお願いします」
スタジアムに出て行くふたり
「ユウキさん、がんばって下さい」
ユウキは親指をたててみせる

そして、大会の幕があけた

ｅｐｉｓｏｄｅ３　バトル大会（後書き）

次はとうとうバトルです。

しばらく続きます

episode4　一回戦（前書き）

初のバトルです！

結構むずかった　笑

episode4　一回戦

「それでは、今から第一回戦を始めます。両者前へ、礼！」
頭を下げるふたり
「では、バトルスタート！」

「いけっ、フィニクス！」
「いってこい、ライチュウ！」
ユウキはフィニクス　こがねはライチュウをだした
相性はすこしユウキが有利だ
「フィニクス上空飛行だ！」
「ライチュウ［十万ボルト］だ！」
「かわせ！フィニクス！」
電気をかわすフィニクス
「フィニクス、［火炎放射］！」
「ライチュウ！［高速移動］で相手の下に逃げろ！」
ライチュウは素早くうごきフィニクスの下まで逃げる
「ライチュウ！［ボルテッカー］！」
「フィニクスかわせ！」
しかし、ライチュウの攻撃をくらい地面に倒れるフィニクス
「がんばれフィニクス！」
「ぐ、ぐー」
なんとか持ちこたえたフィニクス
だが、体力はかなり減っている
「ライチュウとどめの［十万ボルト］！」
「チュー！」

十万ボルトがフィニクスに直撃する
「くー」
弱々しいこえをだすフィニクス
そして、
「フィニクス戦闘不能ライチュウの勝ち！」
「よくやったぞ、フィニクス」
ボールにフィニクスを、もどす
「頼んだぞ、エルレイド！」
「ライチュウ［十万ボルト］！」
「エルレイド！［まもる］！」
十万ボルトは跳ね返された
「エルレイド、［サイコカッター］！」
サイコカッターをモロにくらったライチュウは倒れた
「ライチュウ戦闘不能！エルレイドの勝ち！」
「もどれ！ライチュウ、いけっ、ゴローニャ！」
「エルレイド、［リーフブーレド］だ！」
「ゴローニャ［じしん］で相手を足止めするんだ！」
身動きの取れないエルレイド
「ゴローニャ［あなをほる］」
「エルレイド、感覚で相手の場所を感知しろ！」
エルレイドは全身の神経に集中してゴローニャの場所をさがしている
「今だゴローニャ！」
「エルレイド、うしろだ！［リーフブレード］！」
リーフブレードをくらったゴローニャは倒れた
「ゴローニャ戦闘不能！エルレイドの勝ち」
「ゴローニャもどれっ、いけっ、ルカリオ！」
「エルレイド、［インファイト］」
「ルカリオ！［はどうだん］だ」
「エルレイド、つっこめ！」
エルレイドの目の前に、はどうだんがきた瞬間

「エルレイド［高速移動］」
エルレイドはルカリオのうしろにまわりこんだ
「今だエルレイド！［インファイト］だ！！」
ルカリオに直撃する
「ルカリオ戦闘不能！エルレイドの勝ち！よって、勝者ユウキ！」

ワァーー

観客席からどっと歓声がわく

「強いですね、ユウキさん」
「いえ、こがねさんもですよ」
「いい戦いでした。また機会があればバトルしましょうね」
「もちろんです」
握手を交わすふたり

そのころミドリは
「やっとポップコーンＧＥＴ！」

「さすがですね、ユウキさん」
「ありがとう、カズキ。次はお前だ、がんばれよ！」
「ありがとうございます」
そしてカズキのときがやってきた
「じゃあいってきます、ユウキさん」
「おお、がんばれよ」
「絶対優勝する！」

ｅｐｉｓｏｄｅ４　一回戦（後書き）

とくに書くことありません！

それでは次回をお楽しみに、

ｅｐｉｓｏｄｅ５　九回戦（前書き）

章に分ける事にしました！
あと第九回戦ですが、あいだの第二～七回戦はストーリーに関係ないので省略します、

では、お楽しみください

episode5　九回戦

「それでは、第九回戦を始めます！両者前へ、礼！バトルスタート！」
「いけっ、リーフィス！」
「行くしかないんじゃないの～？ドラドーン！」

第九回戦がはじまったそのとき
「間に合った～、トイレ混んでるんだもん。あ、ちょうどカズキ君だよかった！頑張れ～カズキ君」

カズキ視点

「さっさと終わらせよーぜ～、まぁすぐ終わるかw」
挑発をする相手
「そうだな、そっちがすぐ終わるな」
「はぁ、舐めてんのか？お前なんかなぁ5分でかたずけてやんよぉ」
「ならさっさと始めようぜ、」
「こいよぉ」
「いくぞ！リーフィス！［冷凍ビーム］！」
「ドラドーン、［ハイドロポンプ］」
ふたつの技がぶつかり合う
「ドラドーン、［バグノイズ］かましちゃって～！」
「リーフィス、［まもる］」
間一髪のところでまもるリーフィス
（確かにつよいな…けど隙が多いからいける！）
「リーフィス、［冷凍ビーム］！」
「何度やっても同じ～、［ハイドロポンプ］」

「今だ、［はっぱカッター］！」
はっぱカッターはハイドロポンプにあたり消えてしまうが、水に裂け目ができ、その間に冷凍ビームがはいる
そして、ドラドーンに直撃した
「ドラドーン戦闘不能！リーフィスの勝ち！」
「やるじゃねーか、お前」
「俺を舐めんなよ」
「次はこいつだ、いってこい！ドルマイン！」
（ドルマインか…相性は普通か）
「ドルマイン、［シグナルビーム］やっちゃって～」
「リーフィス［冷凍ビーム］！」
相打ちとなり技が掻き消される
「ドルマイン、［十万ボルト］うっちゃってー」
「リーフィス［まもる］！」
そして、まもりの壁が消えたとき
「このときを待ってたぜ！ドルマイン、［だいばくはつ］！」
（しまった！！）
「リーフィス、ドルマイン共に戦闘不能！」
「だいばくはつでくるとは思わなかっただろ？」
「ああ、まえの十万ボルトはおとりでまもるを釣ったって訳か」
「そのとーり、それでまもるのあとのインターバルを狙ってドカーン！！って訳だよ」
「おれは一枚噛まされたってことか、だがなぁ、おれにも策はある、いけっ、ファマイン！」
「レッツゴー！ゲンガー！」
「ファマイン！［かえんほうしゃ］！」
「ゲンガー、ＪＵＭＰしてよけちゃってー」
「ファマイン！［シャドーボール］」
「ゲンガー［シャドーボール］」
「ファマイン！［十万ボルト］」

「ゲンガー！［サイコキネシス］」
ほぼ互角のたたかい
「ファマイン、［シャドーボール］」
「なんどやってもおなじだ！］シャドーボール］」
「ファマイン！［ジオインパクト］！」
シャドーボールをはなったインターバルでジオインパクトをモロに受けるゲンガー
「ゲンガー戦闘不能！ファマインの勝ち！よって、勝者！カズキ！」
「強かったカズキ」
「いえ、お前もだよ！」
こうして第九回戦はおわった

episode5　九回戦（後書き）

感想、コメントなど待ってまーす

episode6　決勝戦－1（前書き）

やっぱり難しいなぁ

変なところあるかもですけど楽しんでください！

episode6　決勝戦－1

「それでは、いまから決勝戦を始めます！両者、礼！バトルスタート！」
決勝に進んだ二人の試合は審判の合図で試合がはじまる

「どっちが勝つかなぁ、どっちも勝つなんて無理だし、迷うよぉー」
観客席から見ているミドリ
そして、ユウキはフィニクスを、カズキはリーフィスを繰り出した
「二人ともいままでの試合で2体しかポケモンだしてないからなぁ。三体目で勝負がきまるわね」
ふたりのバトル展開を予想するミドリ

カズキ、ユウキ視点

「リーフィス、［冷凍ビーム］！」
「かわして、［火炎放射］だ！」
「リーフィス［ハイドロポンプ］！」
「フィニクス、［エアスラッシュ］？」
「リーフィス！［まもる］だ！」
互角な戦いを見せる二人
（さすが、ユウキさんだ。隙がまったくない…）
（まもるは厄介だな、どう攻めるか…）
「フィニクス、［火炎放射］！」
「リーフィス［冷凍ビーム］でかき消すんだ！」

ぶつかり合う二つの技
砂ぼこりが舞う
「今だ、フィニクス！［オーバーヒート］！」
「リーフィスかわせ！」
しかし、不意をうたれたリーフィスは完全によけることはできなかった
「リーフィス、がんばれ！［はっぱカッター］だ！」
「フィニクス、［火炎放射］で焼き尽くせ」
はっぱカッターは相手の気をひくためのものだったが、炎で焼かれてしまう
（くそっ、どうしたらいいんだ…）
「今度はこっちから行くぞカズキ！［エアスラッシュ］」
「［まもる］だリーフィス」
まもるでエアスラッシュを防ぐリーフィス
「今だ、［流星群］！」
まもるのインターバルを狙ったその攻撃は見事にリーフィスに直撃した
そしてリーフィスの目はとうとう回ってしまった
「リーフィス戦闘不能！フィニクスの勝ち」
「よしっ」
「戻れっ、リーフィス。よくやってくれた」
ボールをポケットに入れ、つぎのボールを取り出す
「いけっ、ファマイン！こっちから行きますよ、ユウキさん。［火炎放射］！」
「とっちも［火炎放射］だ」
ぶつかり合う技、しかし、フィニクスの方が押されている
（オーバーヒートと流星群の後遺症か、そのせいで火炎放射の力が弱まってる）
「ファマイン、［シャドーボール］」
「フィニクス［火炎放射］で防げ」

しかし、後遺症で弱まった力で防げずにシャドーボールはフィニクスへ直撃した
「まだだ、フィニクス！上に向かって［エアスラッシュ］だ」
上にエアスラッシュをはなったフィニクス、その直後上から乱雑におちてくる空気の摩擦
「ファマイン、［十万ボルト］で防げ！そのまま、［シャドーボール］」
落ちてくる空気の摩擦を防いでそっちに気がいってる隙にシャドーボールをあてる
体力もかなり消耗していまフィニクスはシャドーボールが直撃して倒れる
「フィニクス戦闘不能！ファマインの勝ち！」
お互いの手持ちは2体ずつになって試合は中盤に入った

episode6　決勝戦－1（後書き）

次回に続きます、

コメント、質問など待ってます！

episode7　決勝戦－2（前書き）

決着がつきます！

episode7　決勝戦－2

決勝戦中盤
お互いの残りポケモンが2体になった
「たのんだぞ！エルレイド！」
（エルレイドか、相性わるいな…）
「一気に決めるぞファマイン！［シャドーボール］！」
「エルレイド、［サイコカッター］で防げ！」
飛んでくるシャドーボールをサイコカッターで防ぐ
「そのまま［高速移動］だ！」
「ファマイン［十万ボルト］を乱れ撃ちだ」
乱雑に動く強い電流のせいでうまく相手に近づけないエルレイド
（考えたな、カズキ。あの手を一か八かでやってみるか）
「エルレイド、突っ込め！」
「ファマイン、見切るんだ」
「エルレイド、［サイコカッター］を後ろに撃て！」
サイコカッターを後ろに撃ってブーストがわりにすることで動きが速くなる
（速い！このままじゃやられる、これしかない）
「ファマイン、相手をひきつけろ！」
「エルレイド、チャンスだ！［インファイト］！！」
「今だファマイン［じばく］！！」
「なんだって！！！！」
ファマインのじばくは都市一つを壊滅させるほどの強さがあるといわれている
それを、ほぼゼロ距離でくらって耐えるはずがない
「ファマイン　エルレイド共に戦闘不能！」

「よくやった、ファマイン」
「休んでくれエルレイド」
「それではお互いポケモンを出してください」
「やっぱり強いな、カズキ！」
「いえ、ユウキさんもですよ。伝説の名がなによりの証拠ですよ、でも負ける気はちっともありません」
「こっちもだ。お互い最後のポケモン、悔いのない戦いにしよう」
「もちろんです」
「いけっ、ディザソル！」
「たのんだぞ！オルマリア！」
「オルマリアか…ギンノさんに連絡したのか？」
「大会が始まるまえにギンノさんに連絡したんですよ」

～大会前～
「はい、オルマリアにもバトルの楽しさを教えたいんで」
「そう、わかったわ。けれどくれぐれも無茶なことはいないでね」
「わかりました」
そしてオルマリアが入ったモンスターボールが届く
「ありがとうございます」
「じゃあガンバってね」
通信がきれる
「大丈夫かしら…」

～回想終了～

「じゃあ行きますよ、ユウキさん！」
「ワタシ　ガンバル」
「こいっ、カズキ！」
「オルマリア！［シグナルビーム］！」
「ディザソル！［高速移動］でかわせ！」

「オルマリア！よく見るんだ！」
「今だディザソル！［つじぎり］」
後ろに回り込んだディザソルはつじぎりをくりだす
「かわせ、オルマリア！」
しかし、速さに追いつけず喰らってしまう
「大丈夫か！オルマリア」
「ダイジョウブ…」
「よし、オルマリア［きあいだま］」
「ディザソル！［高速移動］でかわせ！」
（あの高速移動を防がないとだめだ…）
「オルマリア、回れ！」
（回る？）
「オルマリア、［シグナルビーム］だ！」
オルマリアを中心に描かれたシグナルビームの円は速い動きのディザソルに当たりそうになる
しかしギリギリのところでディザソルは円の同じ方向に回っているので当たらない
「今だ！ディザソル［あくのはどう］！」
そして、あくのはどうを放つディザソル
回っていたのでよけることなどできないオルマリアはくらってしまう
そして
「オルマリア、戦闘不能！ディザソルの勝ち！よって勝者ユウキ！！」

ワァー　ヒューヒュー

歓声がどっとわく

いいバトルだったぞー
かっこいー

どっちもよく頑張った！

いろんな声が聞こえてくる

「よくやったぞ、オルマリア」

「ゴメン　ネ…」

「いいんだ、ゆっくり休んでくれ」

オルマリアをボールに戻す

「おめでとうございます、ユウキさん」

「ありがとう、カズキ。なかなかいい戦いだった」

「ええ、またバトルしましょうね」

「もちろんだ」

～表彰式～

「ユウキ殿、今大会での優勝おめでとう。優勝カップトロフィーと高級ポケモンフーズ一年分を贈与します」

「ありがとうございます」

ワァー

おめでとー

また歓声がわく

「それでは、ひきつづき船の旅をお楽しみください」

そして、バトル大会は幕をとじた

episode7　決勝戦－2（後書き）

次回からストーリーか進みます！

こうご期待を！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3460z/

ポケットモンスター レグルス

2011年12月29日21時47分発行